

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第663号 平成25年12月20日

今年の流行語大賞（2）

「おもてなし」というのは、とても美しい言葉です。日本人がお客様に対する時の心持を、良く表していると思います。

「おもてなし」というのは、お客様を「熱烈歓迎」しますという事だけではないし、まして、「手厚いサービス」を提供しますという事とも、少し違うように思います。

つまり、「熱烈歓迎」しても、また、「手厚いサービス」を提供しても、そこに「相手を思いやる気持ち」という味付けがなければ「おもてなし」にはならないという事です。

「相手を思いやる気持ちを持ってお客様をお迎えする」これが「おもてなし」の基本であり、これは日本の伝統文化である茶の心そのものといっても良いでしょう。

千宗屋氏（武者小路千家次期家元）は、「お茶の場合、相手をもてなすということは『ある相手に対しての、自分にしかできないもてなしをする』、ということが前提にあります。主体は相手であると同時に、自分自身でもあるのです。ただ一方的に相手を持ち上げ、相手が要求するサービスを提供するのではなく、相手をもてなすことで自分自身を見つめ、その自分を通して相手をもてなす。そういう行ったり来たりがあってはじめて、お茶のもてなしになる。」と述べています（同氏著「もしも利休があなたを招いたら」）。

お客様をお迎えする亭主は、庭や部屋を掃き清め、部屋を掛け軸や花で設え、道具を選び、心を込めて茶を点てる。この様な、お客様をお迎えする亭主の心映え、立ち居振る舞いの全てをひっくり返して「おもてなし」というのだと思っています。一方、亭主から「おもてなし」を受け取るお客様は、亭主の心遣いをしっかりと感じ取り、感謝の心で受け止める、そうした亭主と客とのコミュニケーションが成立して初めて、「おもてなし」は完結するのではないのでしょうか。

亭主と客が互いの気持ちを通わせる事が出来れば、それは「もてなす」事が出来たという事であり、そうでなければ、如何にお金を掛けて豪華な接待をしたとしても「もてなした」事にはなりません。

プレゼンテーションで滝川クリステルさんが合掌してご挨拶する姿が映像で流されましたが、その映像を見て違和感を覚えたのは私だけではなかった様に思います。

日本人は普通、タイの様な仏教国とは違いますから、挨拶の際は合掌しません。ですから、滝川クリステルさんが見せた挨拶の姿は、日本人の「おもてなし」の姿を見せた事にはならないといわざるを得ません。

千利休は、茶の極意として「冬はあたたかに」「刻限は早めに」「天気にも傘の用意」等7箇条を示しています。それは決して特別に難しい事を要求している訳ではなく、客を迎える立場からすれば、むしろその位の気配りは必要といえます。小堀宗実氏（遠州流13世家元）も、そうした「当たり前」の事を「当たり前にする事こそ『おもてなし』の神髄」と述べています（同氏著「茶の湯の不思議」から）。そうであれば、「おもてなし」を「お・も・て・な・し」と殊更にいうのではなく、普段の何気ない日々の生活における人との関わりの中で「おもてなし」の心は発揮されるべきでしょう。そうであって初めて、遠来の客を心から「おもてなし」する事が出来るのではないかと、私は思っています。（塾頭：吉田 洋一）